

# さいかい

2016.1  
vol. 99  
Winter



平戸市 川内岬より 2016年1月1日 7:20

## 目次

地域リハビリテーション専門職認定研修会……………	P1
「あなた自身が“作業療法力”の広報マン&ウーマン」……………	P2
長崎県医療福祉ニーズ発ものづくり促進事業のご紹介……………	P3
各地からの報告 平戸地区・佐世保地区・大村地区……………	P5
大人の発達障害……………	P8
第4回 国際VDT MoCAカンファレンスに参加して ……	P11
第57回 作業療法全国研修会へ参加して ……	P12
「神経心理学的検査研修会」の開催について……………	P13
第6回 Asia Pacific Occupational Therapy Congressに参加して ……	P15
お母さんOTへのエール ……	P16
地域発OT 平戸市民病院の紹介・生月町の紹介 ……	P17
編集後記……………	P19



長崎県作業療法士会

2025年の地域包括ケアシステムの構築に向けて、「地域包括ケアに資する地域リハビリテーション専門職認定研修事業」がスタートしました。

## 地域リハビリテーション専門職認定研修会

今年度、前半の二日間の研修会が平成27年11月28日・29日に行われました。後半の研修会は、平成28年2月13日・14日で開催予定となっています。

この研修会は、長崎県地域医療介護総合確保基金を充てて平成27年～29年の3年間に実施していきます。実施主体は、ナガサキリハビリテーションネットワーク、公益社団法人長崎県理学療法士協会、一般社団法人長崎県作業療法士会、長崎県言語聴覚士会の4団体です。

2025年に向けて、医療・介護・予防・住まい・生活支援が一体的に提供される地域包括ケアシステムの構築が喫緊の課題となっています。昨年の6月には、医療介護総合確保法が成立し、市町村が実施主体である介護予防・日常生活支援総合事業に、「地域リハビリテーション活動支援事業」が位置づけられ、リハビリテーション専門職が自立支援に資する取組を推進することが求められています。我々リハビリテーションを担う関連

団体としては、地域のニーズをふまえた上で、一致協力し当該事業を活用して、しっかり役割を果たしていきたいと考えています。

これから我々は、地域リハビリテーション活動を推進していくために、都道府県医師会と連携をはかりながら、リハビリテーション関連専門職3団体で協働の窓口を設置し、活動をすすめていきます。

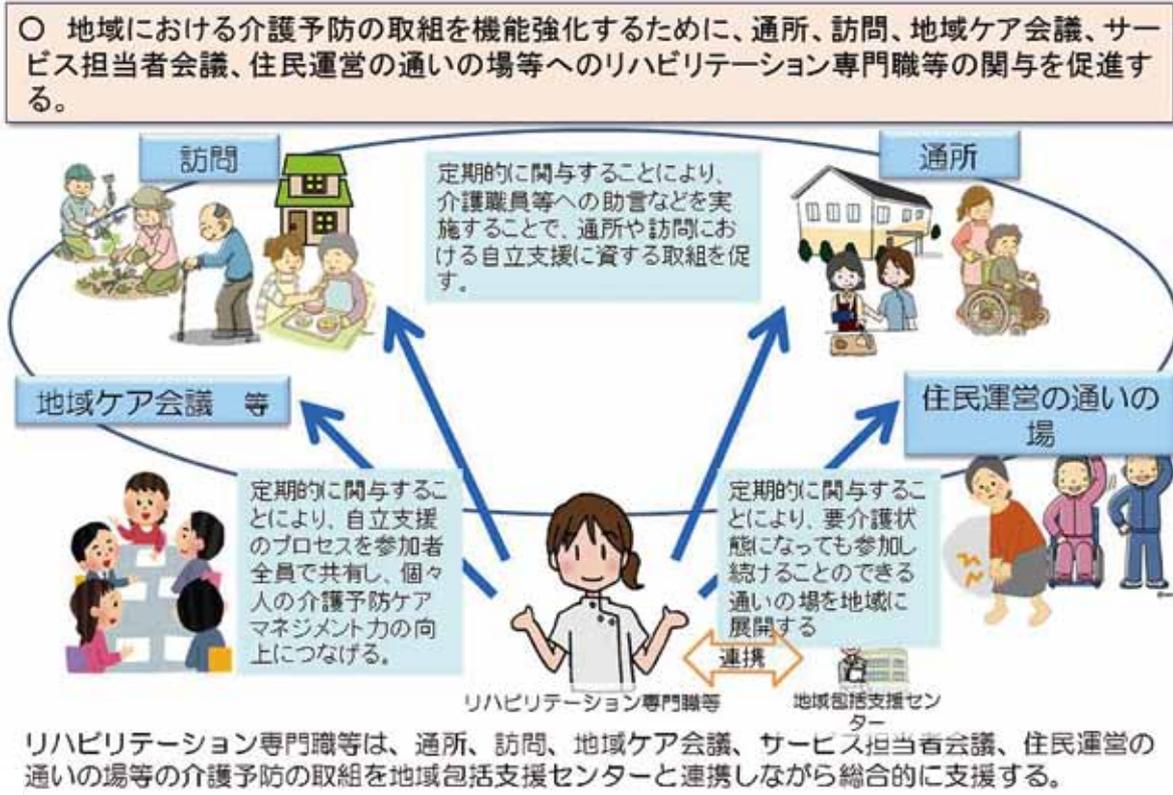
更に市町の医療介護専門職団体との連携をすすめることで、各地域における自立支援の取り組み、そして地域包括ケアシステムの構築へ貢献していきます。

受講された方へは修了証を発行し、市町からの「地域リハビリテーション活動支援事業」協力依頼に対して推薦を行っていきます。



長崎県作業療法士会  
会長 沖 英一

### 地域リハビリテーション活動支援事業の概要



長崎県作業療法士会広報誌「さいかい」100号カウントダウン企画

## 「あなた自身が“作業療法力”の広報マン&amp;ウーマン」

介護福祉タクシー「夢の森」 森 勝彦

長崎県作業療法士会広報誌「西海」の発刊がいよいよ記念すべき100号を迎えられること、また本号が人と言うところの「白寿」に当たることに心よりお祝い申し上げます。

私が最初に目にした頃の「西海」は確かB5版のモノクロの広報誌でしたが、現在ではご覧の通りサイズも大きくなりカラフルでヴィジュアル豊かに洗練された広報誌に進化してきました。それもこれまで携わってこられた広報局の皆さんの熱意と尽力の賜物と頭が下がる思いで一杯です。

振り返りますと、私が県士会活動に関わり始めた当時、全体の会員数も少なく、現在のように4つの地区ブロックにも分かれておらず、県北地区は県士会活動からやや距離をおいた状況にありました。そんな中、長崎労災病院のM先生(現長崎リハビリテーション学院)やK先生にそそのかされ(?)、私も学術部の一員として参画するようになり、今の県学会の土台作りのお手伝いをさせていただいたことを思い出します。またもう一つの思い出は2008年に長崎市にて開催された第42回日本作業療法学会です。学会の準備委員会に学術委員長として参加することになり、プログラム編集や演題採択など多くの方々からの支援を受けながら何とか無事にその責務を果たすことができました。私事ではありますが、学会が開催される2週間ちょっと前、長年家族で介護してきた母を在宅で看取ったのですが、その喪失感を紛らわすかのように学会の準備、運営に追われていたことが懐かしく思い出されます。

さて、30数年前に私が作業療法士になった頃は全国で1000人余りだったのが現在は有資格者数7万人、協会員数5万人を越す職能団体になりました。このように社会的認知を受けるようになったのは、超高齢社会の到来という時代の要請、協会や県士会単位での地道な広報活動、専門技術職としてのたゆまぬ学術研鑽と教育指導体制の充実など様々な要因がその背景として考えられます。しかしながら、一番の原動力は臨床現場で一人一人の患者さんと向き合う作業療法士の“作業療法力”が結集したものと確信しています。

私は病院での臨床現場を2年ちょっと前に離

れ、2014年10月より介護タクシーを開業しました。ここでもささやかではありますが、“作業療法力”が活かされることがあります。佐世保

も坂道が多く、車が横付けできなかつたり、そんな時デコボコ坂道でも安全に車椅子を操作し乗車することでご家族から感謝されたりします。また老老介護など介護力が乏しい家庭で移乗を手伝ったり、外出機会が少ない利用者の買い物支援やお寺詣り、時には気晴らしのための競輪や宝くじ購入の外出のお手伝いなど、生活行為向上マネジメント支援の真似事をすることもあります。そういう時に作業療法士であることを実感し、やり甲斐も感じるのですが、何せ個人事業なので経営の安定に日々頭を悩ませているところです。

最後に、介護タクシーを開業するに当たつてのエピソードを一つ。

介護タクシーの開業は国土交通省の許認可事業になっているため、九州運輸局でヒアリングを受ける機会がありました。その際、担当官から「介護タクシーなのでヘルパーの資格はとらないのですか?」と質問があり、もちろん事前に履歴書も提出し、その場でも作業療法士の説明はしたのですが、その担当官は国家資格としての「作業療法士」を知らなかったようで押し問答になり、通常1時間程度で済むヒアリングが2時間に及びました。改めて国の許認可には縦割りシステムと杓子定規な役所仕事の弊害があることを痛感しました。それと同時に、もし私が看護師だったらあの担当官は同じ質問をしたらどうか?とも思ったり…。

長崎県作業療法士会広報誌「西海」は会員向けの情報誌であることは言うまでもありません。それだけではもったいないと思うので、200号へ向けてさらに多くの国民、県民に“作業療法力”を発信する広報誌へと発展されることを期待しています。

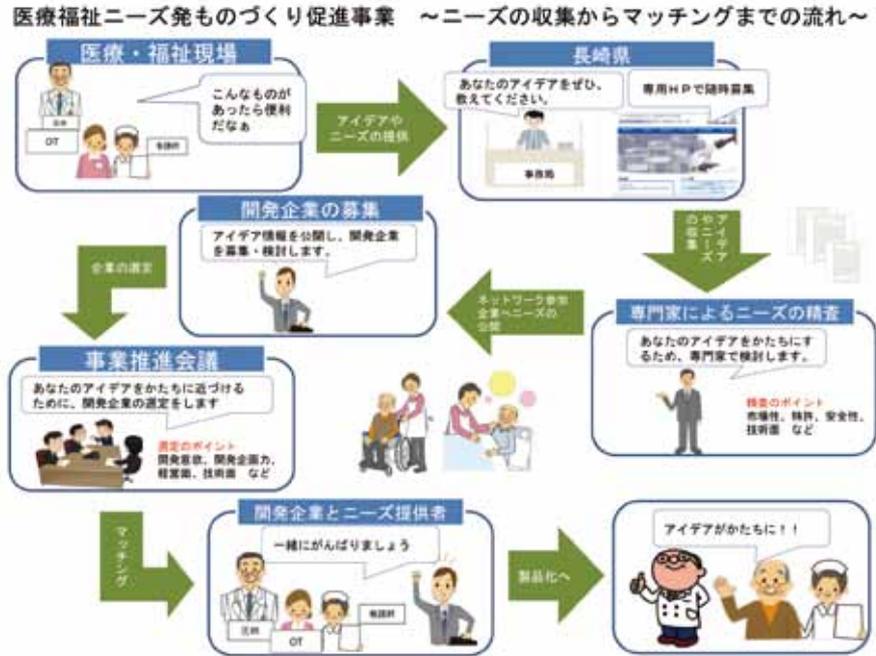


# 「OTの視点×ものづくり技術×アイデア ＝次世代イノベーション!!」

長崎県医療福祉ニーズ発ものづくりネットワーク  
事務局 シンクながさき 松本 裕喜

## 1. 事業概要

平成23年度から、長崎県では、医療福祉介護の現場で“お困りごと”をお聞きし、県内企業の技術力をもって解決につなげる「長崎県医療福祉ニーズ発ものづくり促進事業」を進めています。現在、自社の技術を医療福祉の現場で役立てたい51社がネットワークに参加しており、ものづくり企業として開発してみたいという“お困りごと”に対しては、積極的に医療福祉従事者と一緒になって製品づくりを進めています。



## 2. 開発事例

これまでに病理専用電子カルテの開発や、介護が必要な方が乗りものへ移乗する際の機器など、ハードウェア、ソフトウェアに限定せずに試作開発を進めています。試作を始めるにあたっては、事務局のほうで市場調査を実施し、事業可能性を検討したうえで開発を進めます。さらに、月に1回のペースで、開発状況を“お困りごと”の提供者を含む関係者に報告し、今後の開発に向けて戦略をたてる開発会議を企画します。開発会議は勤務時間終了後に行われることが多く、時に白熱して夜遅くまで議論をすることもあります。何か新たなものが生まれる瞬間でもあり、関係者の方も楽しんで参加されています。

また、試作品ができた時点で、“お困りごと”を提供された医療福祉施設等において、使い勝手や安全性の評価を行ったり、改良点について意見をいただくような機会を創出しながら、完成品に近づけていきます。



(開発会議風景：企業の工場にて)



(OTによる試作品の評価会)

### 3. 様々な開発支援

製品開発には、開発資金が必要となりますが、県事業においては、国や県の補助金を活用しています。本事業では、補助金申請にかかる支援から、プロダクトデザイナーによる製品のデザイン構築支援、流通業者との協議による販売促進に向けた販売戦略支援など多岐にわたる支援プログラムを用意しています。製品が完成した暁には、国際福祉機器展H.C.R.での出展も企画しています。また、技術的にむずかしい開発テーマについては、国内の大手医療機器メーカーや福祉機器メーカーとの共同開発を進めており、各種マッチングコーディネートを積極的に進めています。また、技術面、流通面の専門家を招聘し、課題解決に向けたアドバイスを定期的に企画しています。

### 4. 今後について

医療福祉現場の“お困りごと”に対して、県内企業複数社による協業をもって技術的な課題を克服していきけるような事業展開を目指しています。医療福祉従事者の業務軽減、負担軽減、さらに利用者のQOLの向上を目標として、県内企業が切磋琢磨し現場で気持ちよく使っていただけるような製品づくりを進めていきます。

また、昨今、介護ロボットや各種アシストロボットの開発や導入が進んできています。ネットワーク企業の中には、ロボット開発を進めている企業も参加していますので、現在だけでなくこれからの長崎県の課題を視野に入れた、皆様からの“お困りごと”をお待ちしています。ものづくり企業とこれまで関わったことがない方でも、事務局がコーディネートして円滑に開発ができるような環境をご提供させていただきますので、ぜひ一緒にものづくりに挑戦してみてください。

### 最後に、ものづくり事務局から

医療福祉の現場でお仕事をしながら、「こういったものがあれば、患者さん・利用者さんのためにもなるのになあ。セラピストの業務の軽減や効率化が図れるのになあ」と思われた機会がたくさんあるのではないのでしょうか。作ってみたいという思いをお持ちで、これは！というアイデアが浮かんだときは、ぜひとも事務局にご連絡をください。



(国際福祉機器展・長崎県ブースの風景)



(病院見学会の風景)



(開発製品：OT×県内搬送機器メーカー)



(開発商品：OT×県内発電メーカー)

専用ホームページのほうでお気軽にご書き込みができます。また、事務局スタッフがあちこちの研究会・イベント・現場に顔を出しますので、お気軽にお声を掛けてください。

お困りごとの書き込み先：  
<http://mediwel.org/>

平戸地区

# 健康福祉祭り



柿添病院 中野診療所 永石 光

平成27年10月18日日曜日に、平戸市文化センターにおきまして、平成27年度平戸市福祉健康まつりが行われました。当日は好天の下、たくさんの来場者が訪れていました。私達作業療法士も例年通り、「作業体験」としてアイロンビーズ制作、「高次脳機能障害の啓発活動」としてスライドによるプレゼンで参加いたしました。アイロンビーズには小学生～中学生程度の子供たちが多く来場され、お馴染みの黄色いハッピーを来たスタッフが、丁寧に説明している姿が印

象的でした。高次脳機能障害のプレゼンは対照的に、50代～70代の成人の方々が真剣な表情でプレゼンに耳を傾けている姿が多くみられました。来場者からは「疲れたけど綺麗にできてよかった」との声も聞かれ、巧緻作業の醍醐味を味わわれたのではないかと思います。延べ人数としては113名の来場者が来られ、色とりどりのビーズを誇らしげに持って歩く子供たちをみて、スタッフ一同感銘を受ける一日となりました。



う～ん  
むずかし～よ

アイロンビーズ



## 大村地区

## 作業療法啓発活動

## いきいき健康教室

貞松病院 志垣 彩乃

平成27年10月31日(土)に大村市総合福祉センターにて「いきいき健康教室」を開催しました。昨年に引き続き今年で2回目の活動となりました。

住み慣れた地域で、自分らしい暮らしが送れるよう、国民にとって地域包括ケアシステムの構築は重要な責務です。住み慣れた地域で生活するにあたり、作業療法の視点が国民にとって重要だと言われている中、住民に対し作業療法を知ってもらう場は多くありません。①地域のの方に作業療法を知ってもらうこと ②作業療法士の地域への参画を勧めることを目的に大村・東彼地区OT勉強会「ゆでピー」の中で地域での活動に関心のあるメンバーを中心に啓発活動の計画・実施を行いました。今年は「認知症について知ろう」をテーマに開催しました。

具体的な内容に関しては、まず30分程度、認知症の基本症状や関わり方などの講演を行いました。その後5つのブース【①評価 ②作業活動(ポケットティッシュケース作り) ③運動型脳トレ ④思考型脳トレ ⑤相談】に分かれ、興味を持った3ブースを選択し20分ずつローテーションして活動を体験していただき、活動の終了後にはアンケート記入を依頼しました。

参加者数は、48名と昨年より7名多くの方に参加していただくことができ、また昨年に引き続き今年も参加して下さった方が7名という結果でした。中には来年から専門学校の作業療法学科に入学する高校生の参加も2名ありました。アンケートの自由回答欄では「不安な気持ちで参加しましたが、楽しく勉強になりました」「認知症の進行を遅らせることが出来るよう頑張りたいと思います」などの前向きな意見が多くあり、本活動により認知症について知っていただく良い機会になったことが伺えました。

作業療法について知ってもらう活動の1つにアクティビティを用いる方法があります。この「いきいき健康教室」に関しては、単なる楽しい

アクティビティ体験に留めるのではなく、作業療法士の視点を地域の方に理解してもらいたいという思いで行っています。その為にまずは講演をする、いくつかのブースを設けて体験していただくなど工夫を行っています。実際に作業療法士について深く知っていただくことは難しいとは思いますが、「心と身体は繋がっている」ということを少しでも体感してもらえきつかけになればと思い活動を行っています。

作業療法士にとって、地域との連携は欠かせません。包括ケアシステムに向けて行政の動きが活発化する中、作業療法の専門性を活かし、地域活動に参画するためには、職場内だけでの働きに留まらず地域との繋がりを持つことが大切だと思います。私は、本活動がその繋がりのおかげになるよう継続していく価値があると考えています。地域の方から「私たちには作業療法の力が必要だ」と少しでも感じてもらえるようアピールしていく発信力を身につけていきたいと思っています。

昨年に引き続き、充実した時間を過ごすことができ、改めて地域活動の必要性について考えることが出来ました。広報局としても①会員向けの広報活動に留まらず②地域に対する作業療法の啓発方法について考えていく必要があると思います。皆様からの良いアドバイスをぜひお知らせください。会員一丸となって作業療法の必要性を地域へ発信していきましょう。



# 大人の発達障害

長崎市障害福祉センター 江頭 雄一

『大人の発達障害が増えている』—テレビなどで近年、特集されて、このフレーズを耳にしたことがあるかと思います。「周りとのコミュニケーションが上手にとれない」「仕事で失敗して、上司からよく注意を受ける」「部屋の片付けができない」など、生きづらさを抱

えている人たちの背景には発達障害があります。それを理解し、そして適切な支援をしていくことが大切です。『大人の発達障害』がどのような場面で困り、どのような支援をしていくべきかを考えていきます。

## 大人の発達障害が抱える課題とは

大人の発達障害で特に課題とされていることに”コミュニケーション”と”仕事(実行能力)”があります。それらは自閉スペクトラム症(ASD)や注意欠如・多動症(ADHD)、限定

性学習症(=学習障害; LD)などの障害特性が要因となることもあれば、二次的な障害から生じることもあります(※表に障害別の困り事の一例を載せています)

	主な症状と様子	生活上での困りごと
ASD	<ul style="list-style-type: none"> <li>・社会性の障害</li> <li>・コミュニケーションの障害 ⇒他人への関心が低い、話が一方的 冗談や比喻が通りにくい、マイペースなど</li> <li>・想像性の障害 ⇒特定のことに強いこだわりを持つなど</li> <li>・その他(感覚など)での問題</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・友人ができず、職場で孤立しやすい</li> <li>・場違いな発言をしてしまう</li> <li>・チームの仕事が苦手</li> <li>・緊張して電話対応が上手にできない</li> <li>・建前と本音が分からずに混乱してしまう</li> <li>・自分のやり方にこだわって、周りとの衝突する</li> <li>・職場の音、電気に過敏に反応してしまう</li> </ul>
ADHD	<ul style="list-style-type: none"> <li>・多動⇒常に動きが多い状態</li> <li>・不注意⇒忘れっぽい、指示を聞き逃す</li> <li>・衝動⇒予測なしに行動してしまう</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・工作中、常に落ち着かない様子である</li> <li>・大事な仕事の約束を忘れてしまう</li> <li>・衝動買いが多く、お金の管理が難しい</li> </ul>
LD	書字、計算などの障害	・事務的な仕事ができない

具体的にどのようなことが当事者の生きづらさにつながっているのでしょうか。大人の発達障害の研究と支援に携わっている長崎大

学の岩永竜一郎先生に場面ごとに考えられる問題点・課題について、取材させていただきました。

## Q コミュニケーションでの問題点・課題は？

A 知的障害がなく、言語発達は正常域のASDがある人でも日常的なコミュニケーションに困難があります。事務的なやりとりよりは、雑談などに困難を感じる人が多いと思います。雑談で何を話題にした方が良いのかわからず黙ってしまったり、相手の表情から気持ちを汲み取ることができず相手の意にそぐわない発言をしてしまったり、冗談やいやみの意味が汲み取れず会話の中で食い違いが起こったりするなど、言

葉の意味理解よりは相手の感情や気持ちを読み取ることの問題がコミュニケーションを困難にしています。たくさんの人と話をすると相手の話のみに注意を向けることが難しくなったり、誰が誰に話しているのかわからなくなったりして混乱するということもあります。家庭内などASDの人のことを周囲の人が理解して、その人に合わせたかわりをしてしている場合などは、コミュニケーションの問題は顕著ではありません。

## Q 仕事上での問題点・課題は？

**A** 職場で同僚とのコミュニケーションが上手くできずに職場で過ごすことが苦痛になっている人がいます。作業においてマイペースでスピードが遅いことや、自分のやり方を曲げないことや、複数のことの同時進行ができず、問題になることがあります。

ADHDがある人は不注意によるミスや指示を忘れてしまうミスなどが多いため、仕事上の問題が起こっていることがあります。抑うつ、不安障害などが併存している人が多いため、それによる仕事の継続の難しさがある人もいます。

## 長崎県発達障害者支援センター「しおさい」について



各都道府県には発達障害の当事者とその家族の相談窓口として発達障害者支援センターが設置しています。幼児期の子育てから青年・成人期の就労までの相談、必要な他機関との連携を図っています。県内では諫早市にある

発達障害者支援センター「しおさい」がその役割を果たしています。今回、係長である中村由紀子さんに「しおさい」のことについてお話を聞きました。

## Q しおさいの業務内容について教えてください

**A** 発達障害者支援センターでは、乳幼児期から成人期に至るまでのライフステージに応じた支援を行うこととなっており、相談者の対象年齢に制限はありません。しかし、内容によっては、より専門的な支援を受けられる機関の情報提供を行うこともあります。

支援内容は、①家族や関係機関からの相談に応じる「相談支援」②発達に関する相談に応じ、医療機関や療育機関等の情報提供を行う「発達支援」③各種関係機関との連携を図りながら就労や生活に対する助言等を行う「就労・生活支援」④発達障害に関する普及啓発のための「啓発研修実施」の4つです。

## Q しおさいの利用者には、どのような相談がありますか？

**A** まず、「自分は発達障害ではないか」「診断を受けた方が良いか、どこで受けられるか」「発達障害者に対し、家族や周囲の人がどうかかわったら良いか」という、診断や関わり方についての相談が多いです。また、しおさいの相談者は、全体の85%を高校生以上の青年期・成人期の方が占めていることから、「就労に関する相談」も多く寄せられます。具体的には「就職したいが面接を受けても採用されない、転職を繰り返

す、適職がわからない、就労しているがうまくいかない」といった内容です。



## Q 利用者の相談後の状況はどのようになっていますか？

A 相談時点で「就労したい」という主訴であっても、実際はうつ病等の二次障害を抱えていたり、自分の特性(得意・不得意など)を理解できていなかったり、何に困っているかの認識が不十分であったり、未診断又は診断直後で困惑していたり障害を受容できていない等の状況から、具体的な就労支援に至るまでには長期間(1年以上)を要す

ことが多いです。よって、面接を通して、就労に向けての課題、方向性を整理し、自己理解支援を行いながら、必要に応じて医療機関受診、障害者職業センターやハローワーク、就労系事業所への同行相談等、必要な機関へつなぎ、連携しながらの支援を行っています。

## Q 就労支援に向けた課題はどのようなものがありますか？

A まず、最も重要なのは「生活リズムを整える」こと、そして「体調管理、ストレス要因の把握と対処法を知る、リラックス方法を身につける」ことだと言えます。ある程度健康で規則的な生活が保たれていなければ、就労継続は困難です。次に、「自己理解」に関することが挙げられます。「自分自身の特性(得意、不得意など)を知る」ことは重要です。職業選択のポイントは「したいこと」よりも「できること」は何かを大切に

し、自分の得意な分野を活かす視点を持つことだと考えます。更に、「質問する、相談する」スキルや「感謝、謝罪の気持ちを表現するスキル」を身につけることも必要です。その他、携帯電話やメールのマナーを身につけておくことも、就労してから役に立つでしょう。これらの、就労の基本となる事柄が案外身につけていないことが多いので、丁寧に取り組んでいくことが、就労へつながっていくものと考えられます。

## 大人の発達障害に対して作業療法士に求められること

岩永先生は次のように話をしています。

「コミュニケーションや状況理解において、独特のとらえ方をしている方もたくさんいますので、精神障害領域のOTは常識や他者の考え方などを丁寧に教えることも必要です。社会的交流の仕方などを社会スキル訓練で教えたり、練習したりすることも必要となるでしょう。小児系のOTは将来二次障害が起らないようにするために早期の気づきと早期からの療育を行う必要があります。自己理解を深め、社会スキルを伸ばすOTを続ける必要があります。小児系OTが関わっていても支援が途中で途切れていることがありますので、何らかの専門家の継続的な支援につながることも重要です。」

対象となる方の発達障害に気づき、その特性を正しく理解する必要があります。そして、対象者と周囲(家族、職場の同僚など)へ発達障害と対象者の特性について理解してもらうような取り組みをしていきます。また「しおさい」のような相談機関(障害者職業センター、就労支援施設など)や医療機関といった資源の情報を把握し、必要な機関との連携も考えなければいけません。そして、なにより支援者となるOT自身が対象者の理解者となる姿勢を持つことが大切です。



# 第4回 国際VDT MoCAカンファレンスに参加して

長崎医療技術専門学校 佐久間 聡美

去る2015年7月8日、イギリスで開催された第4回国際VDT MoCAカンファレンスに参加しました。VDT MoCAとは、南アフリカのVona du Toitにより提唱されたThe Model of Creative Abilityの略語で、クリエイティブ アビリティは「不安や制限や禁止されることなく、自由に参加をする能力」と定義されています。近年、イギリスを中心に研究が進む精神領域作業療法の新しい理論です。まだ日本には入ってきたばかりで作業療法士の多くが知らず、日本語版の書籍もなく、もちろん養成校で教えられているものでもありません。因みにイギリス・南アフリカは世界作業療法士連盟に日本より20年前の1952年に加入した作業療法の先進国ですが、作業療法士の人数はイギリス31,998名、南アフリカ3,651名(2012年)、日本は倍以上の74,801名(2015年)となっています。

私がVDT MoCAを知ったのは約8年前で、とある研修会で聴講したのがきっかけでした。精神領域での作業療法で対象となる機会の多い慢性期の統合失調症の方は、回復の速度が非常にゆっくりで、誰が見ても分かる程の明確な効果を数値で示すのが難しいという問題点があります。換言すれば、こちらが一生懸命リハビリをしても変化がないように見えるのです。VDT MoCAでは、対象者の評価をする際に、些細な事にも目を向けて観察しようとしています。ですから、今まで気付かなかった対象者の変化に気付き、効果を数値化できる点で魅力的でした。

また、当時私は認知症疾患治療病棟の専属作業療法士として勤務しており、毎日約60名の対象者に対して集団作業療法を実施していました。一度で60名に関わるには相当の工夫が必要です。私は対象者を認知や意欲のレベルで4～5グループに分け、それぞれに提供する作業や関わり方を変えながら取り組んでいました。しかしそれは、私の経験による主観であり、もしレベル分けや関わり方の根拠は？と問われると客観的に説明できなかったと思います。VDT MoCAは、対象者の意欲のレベルに応じて関わり方等がマニュアル化されていると説明があり、その内容が私の取り組みに非常に似ていました。その時「今までやってきたこ

とは間違いじゃなかった！」と感激したことを今でも鮮明に覚えています。その後、仲間と共に「長崎MoCA勉強会」を発足させ、本格的にVDT MoCAを学ぶようになりました。そして、VDT MoCA協会会長でイギリス・ロンドンサウスバンク大学の作業療法士であるWendy Sherwood氏との交流が間もなく始まりました。

勉強会を発足させてからは、臨床の場でVDT MoCAの視点を取り入れた作業療法を導入し、その方法についてメンバーと協議しながら発展させていきました。臨床の場でWendy氏に直接指導をして頂き、学会発表も行い、ここ1～2年の間は当初に比べると知識や技術の向上がいくらかは実感できるようになっていました。そんな時、Wendy氏より、イギリスで開催される国際VDT MoCAカンファレンスで日本での取り組みを発表して欲しいとの依頼が舞い込みました。英語が話せない私は、参加しても大丈夫なのだろうかと不安を抱きましたが、VDT MoCAを本場で学びたい気持ちが強く、依頼を受けることにしました。前勤務先である日見中央病院の久保先生と共にイギリスへ行き、「日本の精神科作業療法と MoCAの現状」と「日見中央病院におけるVDT MoCAの活用～大集団・小集団のアクティビティー」の2題を発表しました。日本とイギリス、南アフリカでは医療制度が根本的に異なることもあり、社会的入院や集団作業療法についての関心が多く寄せられました。通訳を介して意見交換や聴講ができ、今後のVDT MoCAの研究や英語力アップといった課題も得られた有意義な経験でした。

日本作業療法士協会の倫理要綱には、「作業療法士は知識と技術に関して、つねに最高の水準を保つ」、「作業療法士は、学術的研鑽及び人格の陶冶をめざして相互に律しあう」という文が記されています。今年度より勤務地が臨床から教育分野へと変わりましたが、これからも作業療法士としてしっかり自己研鑽していきたいと思います。そして、学生に還元していきたいと思います。

3月に開催される県学会では、特別企画としてVDT MoCAの紹介をさせていただくことになりました。聴講していただくと幸いです。

# 第57回 作業療法全国研修会へ参加して

千住病院 内野 保則

今年度の全国研修会は富山県、山口県で開催されました。私は11月に行われた山口会場に参加しました。会場は山口県の中央部に位置し、近くには湯田温泉がありのどかな雰囲気でした。

私は身障分野の病院に勤務しています。作業療法士は3名で、院内でのリハビリと訪問リハビリを兼務しています。今まで業務を行う中で地域への関わりの必要性を感じていましたが、自ら積極的に関わっていませんでした。そんな中、今年長崎県士会の地域包括ケア部、生活行為向上マネジメント(以下MTDLP)班の一員として務めてさせて頂くことになりました。班員として務める中で、これから地域の中で、作業療法士がどのような役割をもつべきか、また最近の動向への関心が強くなりました。今回の研修会が「作業は人を健康にする ～地域へとつむぐ役割～」というテーマと知り、参加しようと考えました。

協会指定講座には「地域社会に信頼される作業療法士の姿とは」「生活行為向上マネジメントを実践しよう」「作業は人を健康にする」の3つの講座がありました。



1つ目の「地域社会に信頼される作業療法士の姿とは」では厚生労働省の村井千賀先生の講演でした。作業療法士が関わってほしいところとして、認知症初期集中支援チーム、地域ケア会議、地域リハビリテーション活動支援事業を挙げていました。介護予防を推進し、これまでの機能回復訓練に偏らず、心身機能、活動、参加にバランスよく働きかけることが重要であり、特に地域社会で、活動、参加の領域は作業療法の技術が期待されていると言われていました。

2つ目の「生活行為向上マネジメントを実践しよう」はMTDLP推進プロジェクト担当理事の大庭潤平先生の講演でした。MTDLPは作業療法のみえる

化であり、その中身は作業に焦点をあてた作業療法、クライアント中心の作業療法であると説明されていました。また生活機能に焦点を当てたマネジメントの徹底の重要性や、時期を問わず急性期、回復期でも使用し、退院後のサービス提供者へ不足部分をつなげることの重要性を話されていました。そして対象者に障害があっても、健康であると実感してもらい、できる喜びをもってもらうことが大切とも言われていました。これを聞いて、ほんの少しのできる喜びが積み重なり社会参加へ広がっていくのだと再認識できました。

3つ目の「作業は人を健康にする」は中村春基会長の講演でした。これからの協会のあり方を中心に話をされました。「自立支援に向けた包括マネジメントによる総合的なサービスモデル」が、利用者が生活する中で、望む作業、意味ある作業を行うことで健康になれることを証明したと言われていました。しかし統計では、作業療法士が理学療法士と同じ機能訓練を行うことが多くあるとのことでした。作業療法としては心身機能、活動、参加のバランスのとれたリハビリテーションが必要だということ、そのために生活行為に焦点をあてるMTDLPを活用することを薦められていました。

これらの講演を聞いて、心身機能、活動、参加にバランスよく働きかけることを意識付けできるMTDLPが作業療法士にとって重要なツールであると感じました。まずは自分が臨床で実践し、そしてこれからもより多くの方にMTDLP研修会に参加してもらえる働きかけを班員の皆様と協力し行っていきたいと思いました。

最後に次年度は長崎からは近い熊本県で全国研修会が開催されるようです。作業療法の動向を聞くことができ、自身への刺激になるのではないかと思います。研修会への参加と言いつつ、観光、食事をおおいに楽しむのもいいなと思っています。皆様も一度参加してみたいはいかがでしょうか。



維新百年記念公園



# 「神経心理学的検査研修会」の開催について

長崎県高次脳機能障害支援センター 井戸 裕彦

## 1 研修会開催の経緯

長崎県の高次脳機能障害支援の取組みは、医療・保健・福祉・労働・教育・家族会・学識経験者から構成された長崎県高次脳機能障害支援連絡協議会（以下、連絡協議会と略）において年2回、高次脳機能障害への具体的な支援対策や体制整備について協議しています。長崎県作業法士会からは、沖会長が協議会委員に就任頂いています。

さて、長崎県高次脳機能障害支援センター（以下、高次脳センターと略）への相談の内、受傷発症後5年以上を経過した方からの相談が、毎年約3割程度あります。これらに対し県では、今後、高次脳機能障害を起因として長期にわたり地域で孤立することがないように、退院時に高次脳機能障害のリスク等に関する説明指導用のリーフレットを作成（H24）し、県内救急告示医療機関（31か所）へ伺い、退院時の当事者・御家族への説明について協力をお願いしました。これを受けて、連絡協議会では、今後、徐々に増加が予測される高次脳機能障害に関する受診について、受診後の神経心理学的検査がスムーズに実施されるよう検査スキル等、技術研修の必要性が協議され、主にリハビリ関連職能団体（OT・PT・ST・CP）で取組む事になりました。各職能からの代表と県は事務局を担当し、研修会の事前調査を実施。その結果を協議検討し標記研修開会の開催に至りました。

## 2 神経心理学的検査研修会

神経心理学的検査研修会は、平成25年度から県内リハビリ関連職能団体4士会主催、長崎県リハビリテーション支援センター・高次脳センター共催で、年2回（県南部と北部）、対象は高次脳機能障害の診断・治療・支援にかかる職員とし、これまで多くの方が参加されています。以下、研修内容について紹介します。

### (1) 平成25年度

県南部：H25.10.19(土)～20(日)、会場：諫早市健康福祉センター、県北部：H26.1.25(土)～26(日)

会場：燿光リハビリテーション病院

- 1) 長崎県の高次脳機能障害支援の現状について  
井戸 裕彦（高次脳機能障害支援センター OT）
- 2) 神経心理学的検査の概要  
足立 耕平（長崎純心大学 臨床心理士）

### 3) スクリーニング検査の解釈・基準値・正常値

①	浜松式高次脳機能スケール
	脇屋 光宏（高次脳機能障害支援センター PT）
②	前頭葉機能検査（FAB）
	増田 廣介（十善会病院 言語聴覚士）

### 4) 精密検査の解釈・基準値・正常値

①	標準注意検査法（CAT）
	山田 麻和（長崎北病院 作業療法士）
②	リバーミード行動記憶検査
	増田 廣介（十善会病院 言語聴覚士）
③	ウェクスラー成人知能検査（WAIS-III）
	足立 耕平（長崎純心大学 臨床心理士）
④	日本版遂行機能障害症候群の行動評価（BADS）
	山田 麻和（長崎北病院 作業療法士）

\*参加者数：187名、内訳：OT 123名、ST 29名  
CP 25名、PT 5名、Dr 2名、その他3名

\*意見等：症例検討、行動理解からの解釈について等



（県北部会場：燿光リハビリテーション病院）

### (2) 平成26年度

県南部：H26.11.2(日)～3(月)、会場：長崎県総合福祉センター、県北部：H27.1.24(土)～25(日)

会場：燿光リハビリテーション病院

### 1) スクリーニング検査の解釈・基準値・正常値（1日目）

①	コース立方体組み合わせテスト
	岡崎 裕香（長崎リハビリテーション病院 言語聴覚士）
②	Reyの複雑図形検査
	山田 麻和（長崎北病院 作業療法士）
③	標準言語性対連合学習検査（旧・三宅式記憶力検査）
	足立 耕平（長崎純心大学准教授 臨床心理士）
④	レーヴン色彩マトリックス検査（RCPM）
	岡崎 裕香（長崎リハビリテーション病院 言語聴覚士）

### 2) 精密検査の解釈・基準値・正常値

ウェクスラー記憶検査法 (WMS-R)

足立 耕平(長崎純心大学准教授 臨床心理士)

### 3) 症例検討(グループワーク) (2日目)

山田 麻和(長崎北病院 作業療法士)

1) 症例紹介: 頭部外傷 (TBI)

2) 検討内容: 問題点の抽出→目標設定→戦略立て

\*参加者数: 151名(延207名)内昨年度参加者52名  
(1日目147名、2日目60名)内訳: OT 106名、  
ST 14名、CP 19名、PT 6名、その他6名。

\*意見等: 検査の目的・手技だけでなく、実際の事例を用いての分析・解釈の仕方は、症例の全体イメージがしやすく分かりやすかった。



(症例検討の様子: 耀光リハビリテーション病院)

・研修を2日から1日開催への要望多数。

### (3) 平成27年度

県南部: H27.11.8(日) 会場: 道ノ尾病院

県北部: H28.1.24(日) 会場: 耀光リハビリテーション病院

#### 1) 検査紹介: 評価分析と解釈について

①ウェクスラー成人知能検査 (WAIS-III)

越本 莉香(長崎医療センター臨床心理士)

②遂行機能障害症候群の行動評価 (BADs)

山田 麻衣(長崎北病院 作業療法士)

#### 2) 事例検討: グループワーク

「評価の優先順位のつけ方, 行動観察, 質的解釈の仕方について」

岡崎 裕香(長崎リハビリテーション病院言語聴覚士)

\*県南部開催の参加者数: 63名。内訳: OT 34名、ST 9名、CP 8名、PT 2名、その他10名

\*意見感想等: 様々な職種と話が出来て、考え方のパターンや得手不得手を知ることが出



(グループワーク: 道ノ尾病院)

来て良かった。

・BADsの説明では、(検査時の)実際の映像があり、とても分かりやすかった。

・検査結果から、どういうリハビリに繋がったかを聞きたい。

・グループワークは少し緊張します。

### 3 これまでを振り返り

平成25年度より5回研修会を開催し、実401名の方が参加され、OTは全参加者の65.6% (実263名) でした。アンケート結果から、「研修内容の理解」や「今後の業務に活かせるか」については、約9割が理解できた・活かせる等と回答。研修会への参加動機(複数回答)については、「検査のスキルアップ」が約80%と多い。一方、研修会の開催目的にも通ずる「今後、検査を実施するため」が、平成25年度は5.5% でしたが、平成26年度は53.6%に、今年度(H27) 第1回研修会では89.1%になり、スタッフのスキルアップや新人教育等、各施設の積極的な資質向上への取組みが伺われました。

さて、高次脳センターへの相談件数は、ここ数年、実100名前後を推移していますが、平成26年度より高次脳機能障害の診断の付いた方からの相談が増え、福祉制度(障害者手帳や障害年金等)や障害福祉サービス(障害者総合支援法サービス等)及び就労支援関係機関の各種制度・訓練等の活用など、当事者・家族と共に“生活の再構築”へ向けた支援を比較的にスムーズに開始出来る事例が増えてきました。これらについては、本研修会に御参加いただいた先生方が、研修会で得たスキルを日々の業務で活かしていただいた結果と考えています。大変ありがとうございました。

高次脳機能障害は、ご存知のとおり、外見からは分かり難く、当事者自身の傾向性や取り巻く環境(在宅・職場等)によっても症状の出現の仕方が変化する大変個別性の高い後遺症です。研修会の症例検討では、グループが他職種で構成され、「症例を様々な視点から見ていくことが大変勉強になった」という感想がありました。当センターへ相談される当事者は平均年齢40歳代前半の男性が多く、家のローンや教育費など経済的負担が大きく、支援ニーズは多岐に渡ります。それ故、早期に必要な支援の流れに乗せていくことが重要となってきます。今後も、支援ネットワークの充実に向け、ご理解とご協力をお願いいたします。

最後に、講師の先生及び4士会代表の先生方、仕事の後、本研修会の企画会議(5~6回)と当日運営等、お忙しい中、大変ありがとうございました。

# 第6回 Asia Pacific Occupational Therapy Congressに参加して

長崎大学医学部保健学科 磯 ふみ子

9月14～18日、ニュージーランドはロトルアで開催された第6回APOTCに参加した。長崎、佐賀、神奈川から計7名で12日に日本を出発。約9時間でニュージーランド北島の主要都市オークランドに到着し、翌日長距離バスで4時間をかけてロトルアへ入った。飛行機ではオークランドから1時間ほどの場所にあり、大きな湖と温泉(Spa)が有名なリゾート都市で、夏場には多くの人々が訪れるそう。滞在時は春の入口あたりで、寒さの心配もしていたが、少し肌寒い程度だった。

会場となったロトルアエナジーイベントセンターには日本をはじめ、台湾、韓国、シンガポール、マレーシアなどからの参加者であふれていた。演題はポスター、口述各200題ほど。ポスター発表は所定の時間に演者がポスター前に待機する方式であった。やりとりは英語なので、興味があっても、聴衆がいないポスター前に行くのは若干の勇気がある。少し遠目に眺めていたら、向こうから話しかけられた。台湾からのその演者は、自身の研究を流暢な英語で説明してくれた。似た文化背景の中で、同じようなことが課題となっており、思いがけず話が弾み、とても有意義な時間となった。ポスターブースの横には福祉機器展示ブースがあり、それぞれのブースで問題を解くウォークラリーが準備されていた。問題を全部解くと賞品があるという(!)。自分で前進させることができるStanding table、コンパクトな電動カート、重量感があり体に載せることで安心感が得られるクッション

…。日本では未発売のものがほとんどで、欧米で販売されている機器のサイズに驚いたりしたが、一番驚いたのは、ウォシュレットが展示されていたこと！OTが勧める福祉用具として展示されていた。日本では一般家庭でも標準になりつつある機能であり、日本人の細かな気配りと技術を再認識した展示だった。ウォークラリーは全問制覇！しかし、賞品については後日連絡？賞品獲得ならず…。

さて、ニュージーランドも満喫した。先住民マオリの村ツアーでは、ハカ(民族舞踊)や歌、食事を通してマオリの伝統を学んだ。スパにも行った。日本で言う露天風呂で、ロトルアの泥を顔や体に塗りたくった。ニュージーランドだけに生息するキウイも見に行った。ほとんど真っ暗な環境で飼育されていて影しか見えなかったけれど、木から木へと張られたワイヤーロープを使って森を巡るツアーにも参加した。ニュージーランドでも環境の変化による固有種の激減が問題となっており、環境保護の一環として行われているのだという。

OTの作業としても、キウイや自然、マオリ族の伝統が取り入れられ、ニュージーランドの人たちの生活や思いも垣間見ることができた。

今回初めて行った南半球。遠い国でもOTが頑張っていた。私も頑張らねば。ぜひまた参加したい、そして次回は長崎からもっとたくさんで参加できればいいなと思う。この機会に英語ももう少し勉強しようと思っている。





# お母さんOTへのエール

西海病院 森園 亜由美

まだまだ未熟な私が、このコーナーで何を書いたらいいのか、自分のことを書くのも苦手で、このお話を頂いたときは正直お断わりしたい…と戸惑いました。

でも、日ごろお世話になっている周りの皆さんへの感謝を伝える意味でも、自分なりの経験を少し書いてみようと思いました。

私は現在、精神科単科の病院で働いています。有難いことに2人の子供に恵まれ、近く3人目の出産を控えています。職場の先輩には、半年、あるいはそれより短い育児休暇だった方もいらっしゃる、それが普通でした。しかし仕事復帰後は子供と過ごす時間が減ってしまう事、どうしても大人のペースにさせてしまうということを考え、せめて育児休暇として認めてもらっている1歳まで休みを頂けないかということ、かなり勇気を出して相談しました。先輩方はそれを受け入れてくださり、私は1人目・2人目と1年近くずつ育児休暇を取ることができました。

子供も小さい体で新しい環境に慣れるのにかなりエネルギーを使うのでしょ、復帰後、特に最初は保育園から体調不良の電話が度々かかってきました。そんな時は休むかどうかの判断を出来るだけ早くするようにし、時にはまわりの家族にも頼りながら勤務させてもらっています。そんな時にも「子どもは大丈夫?」「無理しないようにね。」と妊婦の私にまで優しい言葉を頂き、毎回救われています。

自分も今たくさん助けられている分、出産・育児に関わらず個々人の人生の様々なライフイベントの際には、微力ながらお返し出来たらなと思っています。

保育園の園長さんのお話の中に、「どんなに小さい生まれたての子どもでも、すでに色々

なことを感じ取っていて、その時期の行動や表現には意味があり目的があるんです。」という言葉がありました。「一見、いたずらや問題行動、遠回りな行為でも、体験しながら自分なりのスピードでやり方を模索しているんです。だからすぐに手を出さず、見守ったり、本当に必要な時だけ少し手を添えたりして、お付き合いしてあげてください。失敗しても大丈夫と声をかけ、どうしたらいいかな?など一緒に考えたりしてください。」との事でした。

どこか聞きなれたフレーズだな。あ、そうだ。いつも業務の中で患者さんたちと向き合うOTの姿勢だと。育児となると時間も限られ余裕がなく、また我が子となるとついつい感情的にもなりやすく、葛藤の日々ですが、子供にも習いながら、今は勉強の毎日です。

一分、一秒でも惜しいというように、朝晩バタバタ動く私の身体にまとわりつき、たくさんおしゃべりしてくる子どもに、時間の許す限り、しっかり受け止めて、いっぱい抱っこして話を聞いて、子育てを楽しんでいけたらと思います。そして職場の皆さん、社会の皆さん、家族に育ててもらいながら、少しずつ自分もお母さんOTになっていけたらなあと思います。



# 地域発 OT

## 平戸市の紹介

平戸市は長崎県北西部にある平戸島とその周辺を行政区域とする市で九州の最西端に位置しています。平戸市全体の人口は33,256人、高齢化率は36.17% (H27年11月1日現在)となっており、他の地域と比べても加速度的に高齢化が進んでいます。最近では、ふるさと納税で全国的にも有名になり、うちわエビ・平戸牛・あごといった美味しい食べ物がたくさんある地域です。平戸城やオランダ商館など歴史的な観光地もたくさんありますので、ぜひ1度お越し下さい。



平戸市民病院

平戸市民病院がかかげる病院理念

～地域とのふれあいを大切に、地域に愛され信頼される包括医療の実践～

## 平戸市民病院の紹介

平戸市民病院 作業療法士 大浦 淳平

平戸市民病院は病床数100床で一般病棟58床、療養病棟42床(うち介護13床)となっています。リハビリテーション科はPT 7名(内、通所リハビリ2名)、OT 2名、ST 1名、リハ助手2名で内科、外科、整形外科など乳幼児から高齢者まで幅広く対応しています。



藤村薬品杯 ベスト4 バッター大浦



### 平戸で求められる医療、リハビリテーションは？

平戸市には離島もあり、定期的に病院受診をすることが困難な患者さんが多くいます。また、独居老人が多く、近くには回復期病院が少なく老人施設も限られているのが現状です。そこで在宅療養者支援の拠点病院として当院が担わなければならないことは、外来診療、入院治療と併せて居宅介護支援事業所、訪問診療、訪問看護、訪問リハ、通所リハの機能を有し、充実させることと考えています。特に、訪問リハビリは家庭に出向き実際のADL場面に則した実践的な訓練を行うことができます。平戸は、古風な家が多く、玄関の上がり框が高かったり、お風呂が五右衛門風呂だったり歴史の教科書に出てきそうな家も残っています。その為、リハ科としては

「住み慣れた地域でいつまでも安心して暮らせる地域づくりに貢献すること」を理念とし、心身機能の改善、在宅での生活の立て直しを図り、自立(自律)を目指すための支援を行うことが重要と考えています。患者さんには失ったものにとられるのではなく、残されたものに目を向ける価値観の転換が重要で、新たな生活、生き方を目指していけるように支援やアプローチができるように日々努力しています。



### 私が地域に貢献できること

日本の平均寿命は男性80.50歳、女性86.83歳であり、健康寿命は男性71.11歳、女性75.56歳となっています。約10年程は生活障害を背負いながらの生活を余儀なくされる場合が多いです。その中で、生活障害をきたす疾患としては1番が脳卒中、2番目に認知症と言われています。私は今年、認知症キャラバン・メイト養成研修を受けました。これは、それぞれの地域で認知症サポーター養成講座を開催して全国に認知症サポーターを増やそうといった取り組みです。平戸市にも認知症サポーター研修を受けた方がたくさんいますが、活躍の場が少ないのが現状で、どのような活動をしたら良いかわからないといった方がたくさんいると思います。私は、認知症サポーターの方たちに認知症の知識を学び、認知症介護をしている家族の気持ちを理解し、温かく見守る応援

者になってほしいと思っています。また、認知症介護に困っている人たちの相談相手になってあげることが1番大切であり、求められるのではないかと考えます。

今後は、この経験を活かし平戸市で「認知症サポーター養成講座」を行い、認知症の人たちが安心して暮らせる町作りを目指します。その他、当院で行っている各自治会に出向いて行う健康教室などを通して地域の方たちに認知症の知識や関わり方など学んでいただき、コミュニティーの繋がりを深めて行ければと思っています。



### 最後に一言！

作業療法士は、人を助ける仕事であり地域の人たちに恩返しができると考え、いつかは地元で働きたいと考えていました。この度、チャンスがあり平戸市民病院で働くことができ、大変うれしく思ってい

ます。今後は、地元に戻ってきた自分が地域に貢献できることは何か？と常に自分に問いかけながら日々の業務や生活をしていきたいと思っています。

# 職場紹介とちょっと余談

平戸市立生月病院 作業療法士 前川 俊太

地域発  
OT

平戸市立生月病院

## 生月町の紹介

生月町は平戸島の北西にあり、現在は生月大橋で陸続きとなっている人口約6000人の島です。豊かな自然はもちろん、かくれキリシタンや古式捕鯨などの歴史文化、鯨肉やあごだしラーメンと特産品もあります。島内には民泊もあり、レジャーに観光、グルメを堪能しに是非一度遊びに来て下さい。



当院での調理訓練様子

## 当院での作業療法

当院は病床数60床の生月町で唯一の有床医療機関です。リハビリテーション科はPT 3名、OT 1名、リハ助手3名の体制で日々仕事に励んでおります。OTでは外来と入院の運動器疾患、脳血管障害、認知症、進行性難病、廃用症候群と対象は様々です。患者さんのほとんどが島内の方でまた高齢者が多くその方の生活習慣に加え、地域性も考慮しながら、必

要に応じて家族や院内スタッフ、地域のケアマネージャー、島内の社会福祉協議会、福祉施設と連携を図りながら、目標を立て訓練を行っております。訓練としては上肢機能訓練、ADL訓練、IADL訓練、認知症の方に対する学習療法等を中心にそれぞれの患者に合わせて実施しております。

## 今後の展望

私を含めて生月町に勤務している作業療法士は2人いますが、作業療法への認知度はまだ低く、現在売り出し真っ最中です。病院に来られる患者さんに対する作業療法はもちろんですが、今後は地域での取り組みも必要だと考えています。生月町は高齢化が38.9% (平成27年4月1日時点)と全国平均を大きく上回っています。老夫婦世帯、独居高齢者、認知症を有する方など課題は山積みです。地域での具体的な活動としては認知症の出前講座、サロンなど住民活動との連携は今後必要であり、重要になってくると考えています。



生月町内サロン活動様子

## 最後に・・・。

私は専門学校を卒業してからすぐに地元に戻り仕事をしています。時には青年会や消防団といった地域の活動に参加し、様々な職種の方や地域の先輩の方の話聞く機会もあります。作業療法士の作業は生活行為であり、地元で暮らし、仕事をし、時には地域活動に参加することは、その土地の地域性、そこで生活をする人の気持ち、地域の活動を把握することが出来ます。そして、その経験や考えが結果的に対象者に提供する作業療法へ還元できると私は考えています。正直、田舎で生活をしていると不便さを感じることも多々あります。しかし、それでも私は地元が大好きで折角なら作業療法士として地元へ貢献していきます。



当院での学習療法様子



地域リハビリテーション専門職認定研修会



平戸市健康福祉まつり



いきいき健康教室



## 編集後記

新年明けましておめでとうございます。今回の「さいかい」は県北地区が担当となり、編集を行い、内容としても今後の動向を含め、様々な内容を掲載させて頂きました。

執筆をして頂きました、皆さん本当にありがとうございました。

さて、昨年は介護保険改定、本年は診療報酬改定、平成30年は同時改定と制度が変化していきます。

しかし、制度に振り回されず、我々の対象は利用者様であることを忘れずに業務を行いたいと思います。

最後に次号は記念すべき**100号**になります。皆さんの期待に応えられるような内容にしたいと思いますので、ご協力をよろしくお願い致します。

平成28年が皆さんにとってすばらしい1年になりますように 上野

### 広報局

中山 浩介	上野 歩	吉野 雅之
福島 隆	牧野 航	富田 将
志垣 彩乃	馬津川 龍太	山田 翔大
吉野 賢一	江頭 雄一	中川 佳苗
下濱 太陽		

長崎県作業療法士会 ニュース  
 発行 長崎県作業療法士会 事務局  
 長崎市坂本町1-7-1 TEL095-816-2000  
 長崎大学医学部保健学科 作業療法学専攻内  
 代表 沖 英一  
 企画・編集 長崎県作業療法士会 広報局  
 諫早市小野町332 菅整形外科病院内



広報誌「さいかい」は、  
廃液を出さず環境に優しい  
「水なし印刷」で印刷しています。